

令和 7 年度第 1 回

奥州市総合教育会議
会議録

令和 7 年 6 月 26 日開催

奥 州 市

I 開会、閉会等に関する事項

開催日時 開会 令和7年6月26日（木）午後3時30分

閉会 令和7年6月26日（木）午後4時35分

開催場所 奥州市埋蔵文化財調査センター

2 出席者の職及び氏名

倉 成 淳 市長

高 橋 勝 教育長

佐々木 哲 也 委員（教育長職務代理者）

松 本 崇 委員

菊 地 幸 委員

猪 股 登喜子 委員

3 説明のため出席した職員

（協働まちづくり部）

千葉達也協働まちづくり部長、菊池淳生涯学習スポーツ課長

（教育委員会事務局）

高橋広和教育部長、松戸昭彦教育総務課長、千田有美学校教育課長、菅野明史
学校教育課主幹、小野寺正行歴史遺産課長

事務職員出席者：丸山深幸教育総務課課長補佐

4 議題

奥州市文化財保存活用地域計画について

5 会議の概要

開会、市長・教育長挨拶、会議を非公開とすることの決定、議題の協議

第1 開会

高橋教育部長が開会を宣言

以降、高橋教育部長が進行、第4及び第5についてはテーマに従い倉成市長
が座長となり進行

第2 市長挨拶

総合教育会議は、市長及び教育委員会が、本市教育の課題や目指す姿を共有し、一層の連携を深めながら教育行政の振興に取り組むため、教育に関する諸課題について意見交換をしながら、協議・調整を行う場となっている。

本日のテーマは「奥州市文化財保存活用地域計画について」である。文化財は、先人の知恵を秘めた歴史遺産であり、地域社会の活性化や魅力ある郷土づくり、さらには、市民の学習活動における人づくりの資源でもある。市民、特に次世代を担う子どもたちが郷土を理解して誇りを持ち、奥州市民として一体感のあるまちづくりを目指していくため、歴史遺産の調査研究、適切な保存

と活用は重要な役割を持つと考えている。

本日は、委員各位からテーマに関する様々なご意見をいただきながら、具体的な施策への反映を図っていきたいと考えている。

第3 教育長挨拶

教育委員会では、市長と教育委員会とが十分な意思疎通を図り、教育の課題やるべき姿を共有しながら、より一層民意を反映した教育行政を推進するため、本市の子どもたちや市民が「このまちに住んでよかった」と思えるよう、あるいは将来の夢を実現できるよう、しっかりとした学びの場を提供するための取組を展開していくことが重要であると考えている。

現在、その取組の一つとして、児童生徒の「郷土愛」を醸成するとともに、将来に夢や希望を育むことをねらいとした「ふるさと学習」を進めており、奥州市を深く理解することにより、「ふるさと奥州」に親しみと誇りを持ち、「郷土愛」にあふれる心豊かな児童生徒の育成を目指している。

本日のテーマは「奥州市文化財保存活用地域計画について」である。「文化財」は、郷土理解を深めるためには欠くことのできないものだが、その保存と活用に関しては、様々な課題を抱えている。

本日は、委員各位からご意見をいただき、本計画の策定に活かしてまいりたい。

第4 協議

本日の議題となる「奥州市文化財保存活用地域計画」の素案については、奥州市文化財保存活用地域計画作成協議会での協議を経ておらず公開する段階にないことから、市長が非公開とする旨を会議に諮り、決定。

«以下、非公開»

テーマ「奥州市文化財保存活用地域計画について」

○歴史遺産課長が資料に基づき説明

【協議】

○各委員から意見発表

佐々木委員：この素案はほぼ完成されており、ここまで整備されていることに敬意を表する。最初に1点確認したいが、最終的にここに新たに付け加わる事項はあるか。

歴史遺産課長：現段階では、この内容をさらに煮詰めていく形で進め、付け加えるものはほぼないと考えるが、いただいたご意見によっては付け加える場合ももちろんある。

佐々木委員：承知した。まずは序章、計画作成の背景など、大変分かりやすく整理されており、私なりに計画の必要性を理解できた。ただ、文化財の範囲があまりにも広く、点数も相当の数があり、この10年間でどこまでやり切れるのかという心配はある。その後の10年、さらにその後の10年とあるので、

少し絞り込んではどうか。文化財保護審議会が進捗管理、点検評価を行うとあったが、具体的な達成目標や指標などがあれば、管理や点検もしやすいと思う。

第4章に文化財の保存・活用に関する目標とあるが、すべての文化財を残し伝えることは現実的に難しいので、完全な形で残すべきもの、いずれは朽ちるが朽ちる前に何らかの形で資料として残すもの、というような区別があつてもいい。どのような形で残して伝えるか検討が必要。

第6章の保存・活用の課題・方針について、調査研究というのは、疎かにできない基本的な部分であり、これからもずっと継続していくと思うが、そのためには、人、予算、時間等の確保についてどのような計画を立てていくのかということが非常に大変。計画の期間内で、進めながら検討していくこととは思うが、なかなか結論は出ないだろう。特にも予算の確保は一番難しいと思う。

それから、民俗文化財の後継者育成について。解決策は分からぬが、絶対に残さなければという方々もいる中で、何か発想の転換のようなものが必要ではないか。日本全国で危機に瀕している民俗文化財はたくさんあって、全部残していくことは不可能だろうと思う。全国の何か所かで、プロ集団による伝承の形を取っているところがある。芸術性を高め、職業・生業として伝えていくという形が、岩手、あるいは奥州市の中にあってもいいのではないか。

最後に文化財の活用について。私が一番最初に考えたのは、学校教育、社会教育の中での学習資源としての活用である。今日の参考例として示していただいた、観光資源や産業資源としての活用も面白いが、観光資源というと、他の地域の方々のためのサービスだと思ってしまう。まずは住んでいる私たちが活用できることを考えるべきで、それをいい使い方をしているな、楽しそうだなという評価があって、他からたくさん的人が来てくださるというのが望ましいような気がする。まずは市民の方々が今までよりも自由に使えるような活用の仕方があっていいのかなと思う。

菊地委員：初めに、説明の中で、この計画はマスタープランで構想的位置づけであり、課題として収蔵スペースの不足が懸念されているため、保存施設の整備を図りたいとあったと思うが、具体的な方向性として予定されているのか伺いたい。

歴史遺産課長：収蔵スペースとしての施設はいろいろあるが、先ほど見ていたいとおりどこも満杯状態に近いため、さらに施設は必要だと考えている。具体的にどういうものかというところまでいっていなくても、整備する方向性で計画に載せ、それに則って進んだ場合には、財政的な支援が国の方から受けられるため、整備する方向で検討していくこととしている。

菊地委員：承知した。この計画を読み、まず國の方針として、保存する対象から、地域資源として活かす対象へと変化していることが分かった。有形、無形、景観、植物等と本当に幅広く、どこから手掛けといったらいいのだろうとは思いつつ、それぞれを点ではなく面でとらえながら市民のアイデンティ

ティを醸成するところにつないでいこうというもののかなと理解した。

それで、課題としては一言で言うと継承困難ということで、無形文化財については一昨年（総合教育会議のテーマとして）出されたためイメージできるし、有形文化財については、先ほど見せていただいたように、収蔵スペースの不足が懸念されることが奥州市では一番の課題ということ。示された活用事例では、スペースに収めるようなものではなく、大きな建物の活用で、まちづくり、観光との関連。立地や建物的に、ザ・日本のライフスタイルという感じで外国の方向けというイメージを持ったし、一方は本当に風格のある建物で、この空間自体に魅力があり、何かできそうだなと感じた。奥州市も、立地やその物自体によって使い方は多々考えられ、観光なのか、教育なのか、まちづくりなのか、何と結びつけるかによっても変わるとと思う。佐々木さんがおっしゃったように、対外部なのか内部なのかということでも活用の仕方は変わってくるため、いろいろなパターンが考えられる。

最後に、私も外部なのか内部なのか考えた時に、その文化財の価値は、誰かが価値があると言っても本人が価値と感じなければ価値にはならず、私たち市民が大切だと思っていることそのものが、文化財の価値になるのではないか。まずは市民が身近に感じたり、活用できるような使い方っていうのも、この事例の中にはなかったが、パターンとしてはあると思う。例えば、建物の雰囲気に親和性のあるような手仕事、陶芸や絵画など、そういうことをされているアーティストさんは奥州市にもいらっしゃるし、あとは音楽、ライブなど、その場の建物の雰囲気と親和性があって、建物の魅力を生かせるような活用の仕方もあるのではないかと思う。活用と保存と2つあるが、活用者が保存者になるという、責任のある賃貸モデルのようなものはどうだろうと思った。この計画の中には市民のアイデンティティという言葉がたくさん出てくる。まずは私たちが知って、大切だ、価値があると思うことが大事なのではと感じた。

猪股委員：私もひとつおり目を通して、まずはとてもきちんとされた計画だなという印象。

先ほど菊地さんから、本人が価値があると思うものが価値なのだというお話をあったが、遠野市の「遠野遺産」というものがあり、その取組にとても学ぶべきところがあると感じている。遠野市は、独自の「遠野遺産」の認定制度の取組が評価され、2024年10月に「世界の持続可能な観光地100選」に選ばれた。その制度は、市民が自分たちの地域でこれを遺産として継承していくきたいとなった場合に、市民自ら申請し、「遠野遺産」としての認定を受け、その後補助金の事業申請をして審査を受けて交付決定、その補助金を使いながら自分たちで地域のものを守っていくというもの。例えば、神社の鳥居の修繕を市民自身が行ったりということで、守って繋げていくということがうまくできており、参考になるのではと思った。遠野市では169の「遠野遺産」が認定されており、有形文化遺産と、郷土芸能や伝統芸能などの無形文化遺産、植物や地形などの自然遺産、それから有形無形自然が複合する複合的遺産に分類し、市民の手で保護・活用を行っている。「遠野遺産」は

169で、指定文化財は163、両方兼ね備えているものは37とのこと。自然であれ、伝統であれ、歴史であれ、意識的に自分たちで守っていこうという気持ちが市民の中に起きていることがとても参考になるなと思う。

それで、この計画を見た時に、誰が主になっているかというと、やはり行政が主ということで打ち出されているが、この10年の間にどれだけ実現できるのだろうと思ったときに、市民を巻き込んで、市民が自分たちでそれを維持していくというような体制をつくっていくのも大事ではないかなと感じた。

それから、奥州市の文化財に係る当面の課題として、文化財の継承困難ということで、民俗文化財の担い手がいないとのことだが、今現在、その団体が休止している等の実情を歴史遺産課で把握しているのか伺いたい。

歴史遺産課長：（文化財）パトロールというものを2年に一度実施しており、具体的な実数を把握している。4年度の数字で一つ古いものにはなるが、「定期的な活動ができている団体」は38、2年度が50なので12件の減、「活動を休止している団体」は11、2年度が2なので9件の増、「活動を中断している団体」は32、2年度が29なので3件の増となっている。また、アンケートで今後10年間の見通しを聞いており、「問題なし」が28団体で、2年度が34団体なので6団体の減、「現在活動しているが若手の構成員が少なく特に50代以下が5名以下」が20団体で、これも2年度の18団体から2団体の増、あとは、「現在中断しているが復活の可能性がある」という団体が14で、2年度の16から2件の減、「復活が困難、残っている構成員が少ない、あるいは高齢化により演舞が困難」という団体が19で、2年度の13から6団体増えている。なかなか厳しい状況だというのが実態。

猪股委員：承知した。計画はこのとおりだとは思うが、計画どおりのスタートではなく、その前に一步踏み出して早め早めに進めておくといいのではないかと思う。

松本委員：利活用ということでお話しする。私はめぐみネット（奥州市環境市民会議）の方にも参加しており、めぐみネットと文化財はつながらないところはあるかもしれないが、めぐみネットの関係で自然を見つつ、文化財にも触れるというツアーを時々やっている。例えば米里のツアーで、自然を見ながら米里に残っているいろいろな文化財というか歴史遺産などを見て、文化財に興味がない人も興味を持つ入り口になる、というもの。そこで解説員の人たちが面白いと興味を持ちやすい。どうしても文化財は点と点で、それぞれの点の場所で大事だ大事だと言っているが、どうにもつながらないなと思うところがある。米里の話を聞いた時に、人首というのは、アテルイの息子の人首丸が逃げ込んだ場所だから人首となり、最終的に鉄の産地だったから軍事拠点としても役立っており、その千年後くらいに宮沢賢治が来て五輪峠で泊した、というようなストーリーを聞くと、とてもロマンを感じた。その場所に行くだけではなく、そこにまつわる話なども含めて聞くと、こういう面白みのある土地なのだと感じる。そういうつながりが出てくるといいなと思う。黒石寺の藤浪洋香さん（住職）の話なども聞くと、固い話ばかりではなく、その時代の背景がこうで、こんなことがあったからこうなったのは

仕方ないことでしょう、というような話を聞くと、文化財というのは、歴史の大事なものだけではなく、その時代を生きた人たちの生きた証しに歴史、ロマンを感じるものがあり、そういう点と点をつなぐ工夫のようなものがあるといいのかなと思った。また、岩谷堂のお城（岩谷堂城）に大谷吉継が関係していたことも全く知らなかつたので、こんな歴史の中心にいた人がこちらに関わっていたのかと感動した。

私もこの土地で暮らしてはきたが、あまり魅力を感じたことがなく、アテルイやいろいろな人が負けた時に最終的に追いやられた地域というような歴史しか頭になかったので、そういういい部分を伝えてつないでいける人を育てたり発掘したりして、その人と手を組んでやっていくというのも大事なのかなと思う。

最後に、先ほどの保存場所に関わるところで、なかなか施設的に難しいのかなとは思いつつ、廃校を有効利用できたらと思う。

○意見交換

市長：それぞれの委員の方の意見も参考になった点があると思うので、他の方がおっしゃったことで、確かにこういうことが必要かなというようなこと、例えば今の話でいうと、ハード面も必要だが、ソフト面でストーリーをきちんと作れば魅力が高まるのではないかという視点など、話を聞いた中で刺激されたこと、全体的なことでも何かあればお話しいただきたい。

佐々木委員：廃校舎に関しては、あまり耐震など気にしなくていいのかなと。それから、結局文化財は、開発か保存かという議論になり、どちらを選択するか難しいところ。私の地域は人がどんどん減っており、いつまでこの地域を維持できるのかと感じる。散居の村はかなりコストパフォーマンスが悪いというか、維持管理がとても大変。一軒一軒がポツンポツンとしていて、雪かき、下水道、どれを取っても大変。この状態でいつまでもあり続けるのは無理なのではと区長さんに言っても、いや、散居の村はこのまま残したいと言う。その気持ちも分かるが、自治会が持たないし、いつかはやはりどこかに住居を集めなければならない時が来ると思うので、もう今から考えなければいけない。散居は景観に入らないか。

歴史遺産課長：散居の関係は、先ほどの文化財の区分でいうと、文化的景観という区分に入りそうではあるが、現在は入っていない。ここだけの話にはなるが、文化庁の方や、江刺出身の九州大学名誉教授の菊地成朋（きくちしげとも）さんという方なども、この散居というものが珍しいということで非常に興味を持たれているようだ。ただ、外から見た時の散居の景観というものと、今お話があったような実際の生活者としての散居というのは意味合いが違い、なかなか難しいものがあると思う。

佐々木委員：小学校の社会科の資料か何かに紹介されたりもしているが、景観に入っていないというのは意外に思ってしまう。いつまで景観を維持できるのか大変だなと思う。開発と保存、常に悩む。

市長：武家屋敷なども同様だろう。住むにしてはあまりにもコストがかかる。

歴史遺産課長：どこでも難しい。

松本委員：市役所前にあった屋敷も、維持管理が大変だということで、コンビニになった。

教育長：今までではやはり保存の方が緊急度が高くて予算もかかるため、そちらに重きを置いてきたし、活用の方の視点っていうのは結構弱かったのではないかと思う。あまり活用されていなくともったいないと感じているところもたくさんあり、特に歴史的建造物でいうと、前沢の旧後藤正治郎家は1億くらいかけて修理をしてとても立派になっているが、希望があった際にしか公開しないため、ほぼ認知されていないのではないか。何かのイベントに利用したり、あるいは常時公開する方策はあるのではないかと思っている。旧安倍家も同様であり、旧高野家もお祭りのときしか公開しないため、なかなか行くチャンスもなく、入れないでいる。これらの建物は何かに活用できるのではないか。後藤伯記念公民館も違う用途での活用を考えているのでは。

協働まちづくり部長：基本的には、文化庁は活用しなければ補助はしないという考え方のため、活用できるようなことも審議会の中で検討している。

教育長：ただ閉めていても劣化してくるだけで、かえって定期的に開けた方が建物ももつのではないかと思うので、いろいろな視点で活用できるよう、その視点を大事にしていきたいと感じた。

歴史遺産課長：今のお話に関連して、最初に市長から話された内閣府の迎賓館（赤坂離宮）についてだが、利用するには3つのパターンがあり、一番手ごろな価格なのがケース3というもので、和風別館の3日間利用で約280万円。次にケース2で、前庭3日間で約1,000万円、そして、ケース1の前庭と本館利用で約2,800万円となっており、そういう金額であれば、文化庁もいいでしょうとなったようだ。奥州市でも非常に立派な建物があるので、何か活用できればと思う。

○市長総括

市長：まず文化財は、有形と無形で分けて考えなければならないと思う。有形の場合は、もうある程度価値が定まっていて、活用できそうな立派なものから、これはどうしたらいいのだろうというものまであるため、うまく分類する必要がある。無形に関しては、いろいろな人の話を聞いてみると、やはり舞台が必要だと思う。舞台があることによって継承されるということを強く感じる。先日、江刺の鹿踊保存会のある若い方が、ドジャースタジアムでやりたい、それはもう夢なのだが、それを思うだけで練習に力が入ると言っていた。これは本当にそのとおりだと思っていて、できれば夢のままにしないで段階的に進められればと思っている。例えば、今度10月あたりにトーランスとの交流があるが、その交流の中で鹿踊のビデオを流し、そこにいる人がすごいなと思って気に入ったら実はドジャース関係者で、そうなればすぐそちらに行くとか、夢のような話かもしれないが、結局そういうチャンスをまず作っていかなければいけないと思う。訴え方というのはかなり幅が広く、今の時代は動画を使えるということもあってコストもそこまでかからない。舞台としては最後の一回しかできないかもしれないが、それはそれでしっかりやるという流れを作れればいい。

それで、先ほどお話があった、ストーリーがあることによって、1つの文化財だけではなく地域そのものでも価値を出すと。これだと有形と無形と一緒にできる。その土地の歴史から文化的な背景から、ひっくるめてうまく使う。それを考えて上手に使っているのが遠野市だとお話があったが、まさにそのとおり。百選に選ばれたことによって、自分たちのやっていることは間違いではないのだと自信を持つ。文化財保護は、先ほど言ったように、無形なら舞台を与える、有形なら、これはすごいもので、こういうストーリーがすごいのだと自信を持つことだと思う。そこで、さて誰がやるのかという話になる。行政は絶対にやらなければならないが、今までのように行行政主体だけではなく、例えば、ビジネス感覚のあるNPOが、これとこれを使ってみたらインバウンドを呼んだとか、こういった仕掛けがこれから活用の面ではやはり必要だと思う。要するにプレーヤーの幅を広げるということ。

また、保存場所に関しては、これからも地道な研究や発掘調査が必要だし、まだ価値が分からぬようないいものがたくさんある。物理的には、先ほどの廃校跡の活用含め、まだ価値の分からぬものを保管する場所は必要なのだと思う。そして先ほど、調査ごとに分けていたと言っていたが、誰でもアプローチしやすい分類の仕方が必要になってくる。もう現地に行かなくても分かるようなデジタル化の仕掛けを作らないと、研究というものは進まないのでないかと思った。

それから、今日ぜひともここで言ってほしいと言われていたことがあるのでお話する。文化財ではないが、宇宙遊学館の方々から、乙項について、実はとても幅広く使えるもので、これも乙項に関係するのかというようなことがたくさんありますと。それで、彼らとしても、単に天文のことだけではなく、いろいろな幅広い研究活動をしながら、学術部のようなところを設けて、実はもっとやりたいという話が出てきた。どうしてかというと、一つはやはりとても自信を持っているということと、もう一つは市内の子どもたちがあまり来ないからということらしい。小学校は来るが中学校は来ない。仙台市では、小学校、中学校も市の博物館に一度は連れていかなければならぬようで、これについては行政としてバックアップが必要ということ。そして何よりも、今出来上がっている知識というものは、もうAIが短い時間で全部やってしまうため、AIができないような、まだ出来上がっていない理論なり、考え方なり、創造なり、そういうことを作っていける子どもたちを育てなければいけないのではないか、それは実は宇宙遊学館ができますという話だった。

このような、自分たちがやりたいという人たちをどう束ねるか、その伴走支援をどうするかということが、もしかしたら行政で一番大切なことかもしれない。お金の問題はどうしても出るため、伴走支援としてはやはりお金と人なのだろう。これらをうまく組み合わせるような方法が今回の計画に付け加えられれば、非常に実践的なものになるのではないかと、皆さん方のお話を聞いて感じたところ。佐々木さんもアウトプットの話をされたが、実際これをやるのだという実行計画のリストが見えてこないと、なかなか人もお金も動かないし、ストーリーもできないと思う。そのようなことをやるソフト

ウェアをもう少し充実させるやり方を考えないといけないのではないか。ハード面もいろいろ大変だが、これからは活用も含めたソフト面にお金と時間をかけなければいけないのだと思う。

第5 その他 なし

第6 閉会

高橋教育部長が閉会を宣言